

高校中退 の進路指導

中退していく生徒にどのような進路指導ができるのか——。高校の先生にとっては悩ましい問題でしょう。中退させないための指導は行うにせよ、辞めることが決まれば、その生徒とはそれっきりというケースも現実には多いのではないのでしょうか。一方で、高校中退をきっかけに社会との接点を失った若者が行き場をなくしている現状が大きな問題としてクローズアップされてもいます。先生が彼らに対してできることは何かを改めて考えてみたいと思います。

取材・文／伊藤敬太郎



1 中退リスクがあるのはどんな生徒か？

中退者数は減少傾向だが
転校は増えている兆しも

ここ10年ほどの間、高校の中退者数はデータ上減少し続けている(図1)。2011年度には5万3937人と10年前の約半分に減少。中退率も10年前の2%台から、2011年度は1.6%にまで下がった。ここ3年に絞っても中退者数は対前年比で減少を続けている。

ただし、この数字の見方には注意が必要だ。近年、受け皿としての通信制高校(↓P36)が増加したことに伴い、全日制高校で通学を続けられなくなった生徒が、中退せずに通信制高校へ、転校するケースが増えているからだ。中退・転校を合わせた数は、「むしろ増加しているのではないか」と指摘する声もある。

また、一部の通信制高校が生徒の自立支援に関して果たしている役割については後述するが、全体を見た場合、通信制高校に転校後、2度目の中退をしてしまう生徒も非常に多いといわれている。転校をしたからといって、必ずしも問題が解決しているわけではないのだ。

では、今、中退・転校するのはどんな生徒なのか？ 内閣府「高等学校中途退学者の追跡調査企画分析委員会」の座長を務める放送大学の宮本みち子教授は、10年、20年前と比べると中退者の実態が大

きく変わっているようだという。

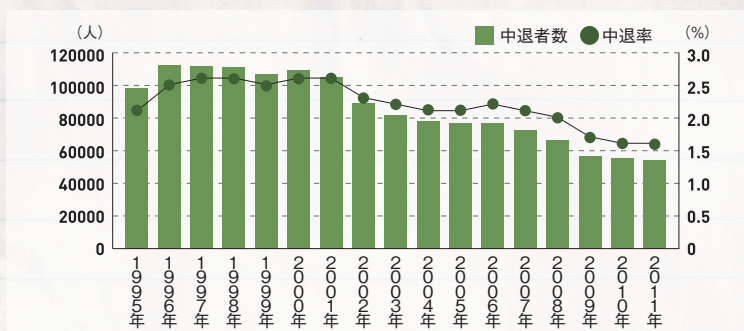
「かつては、先生と対立して学校を去るタイプの生徒が主流でした。彼らは辞める理由も明確で、ある意味ではエネルギーがありました。今はそういうタイプに代わって、「ハラハラと葉っぱが枝から落ちていくように学校を去っていく」生徒たちが増えているようです。このタイプは何を考えているのかが外からはつかみづらく、高校を辞めたあとに自力で生きていくエネルギーが十分でないことが懸念されます」

例えば、自分から良好な人間関係を築くことができない生徒だ。それがいじめというかたちで問題化することもある一方で、特に大きなトラブルがあつたわけでもないのに、学校に友達も居場所も作れず、しだいに学校に来なくなる生徒も多い。極端な例では、仲の良かった友達と違うクラスになっただけで不登校になるケースもあるという。

ネット依存から 不登校→中退という例も

こうした生徒たちがネット依存に走る例も増えている。ネット上で知り合った同質の仲間と「傷をなめ合う」うちに、そこで自分の世界が完結してしまうと、不登校は長期化。その結果、中退へとつながっていく例もある。

図1 高校中退者数及び中退率の推移



出典：文部科学省「平成23年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について」

もう一つは、著しく学習意欲が低下している生徒、学力そのものが低く、高校の勉強についていけない生徒だ。これらの生徒に関しては、経済状況の悪化に伴う貧困の拡大が大きく影響しているのではないかと宮本教授はいう。

「経済的に困窮した家庭ではさまざまな問題が起こりえます。高校生がアルバイトで家計を支えることを親に求められることも多いですし、親や兄弟がメンタル面の問題を抱えていたり、DVが続いたりするケースも多い。幼いころから理不尽な経験を重ねてきた結果、高校に入るころには疲れ切つてしまい、勉強への意欲を失い、自

図2 高校を辞めた理由(複数回答)

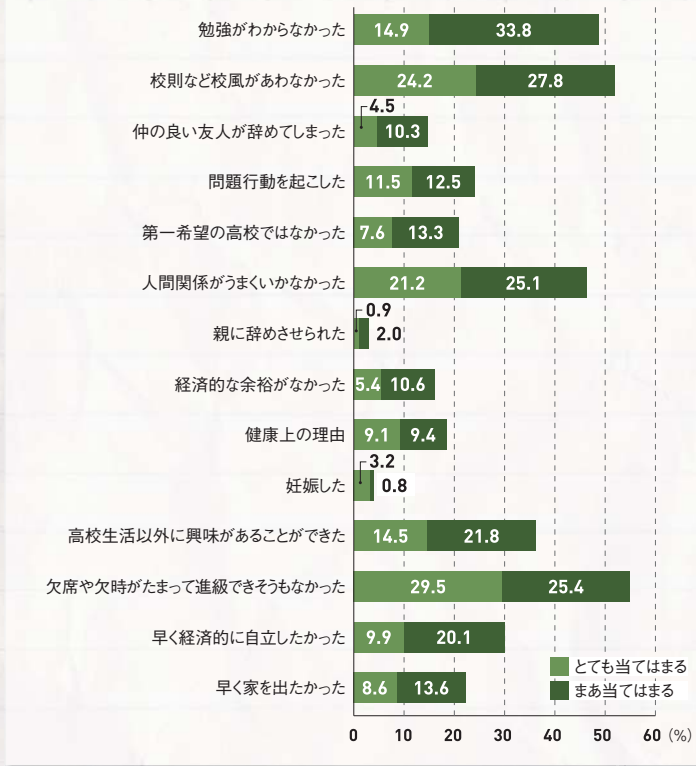
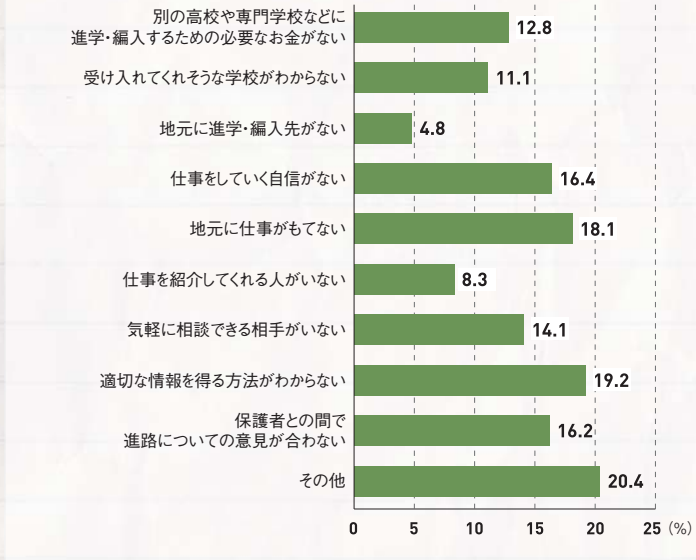


図3 高校を辞めたあとの進路決定時に苦労してきたこと(複数回答)



出典：内閣府「若者の意識に関する調査(高等学校中途退学者の意識に関する調査)」
 ※高校中退後おおむね2年以内の者を対象に調査(図2、3とも)

しかし、不登校になってからでは生徒と直接話をするのも難しくなり、対処が難しくなってしまう。また、中退リスクが高い生徒ほど、自分から先生に相談してくるケースは少ない。学校に来ている間に、先生が気づいてあげられるかどうか、鍵を握るだろう。

「問題を抱えた生徒は必ずサインを出しています。不登校になる前にそれに気づくには、生徒同士で過ごしているときの様子を先生がしっかりと観察することでしょう。例えば週に数日も教室で昼食を食べていると、生徒の人間関係の異変にも気づくのではないのでしょうか。また、私は教員時代、毎日クラスの生徒に興味や興味や生活について尋ねるさまざまなアンケートを取っていました。生徒に楽しんでもらうような仕掛けが必要ですが、うまく習慣化できれば、回答の内容や筆圧などからも生徒の変化が読み取れ、大いに指導に活かせました(安川氏)

自信や意欲を失っている生徒の目に向けてさせるためには、将来の目標について考えさせるキャリア教育も有効だ。しかし、家庭崩壊やメンタル面の不調などの問題を解決できなければ、生徒は前へ進むことができない。さらに、たとえ目標をもって卒業しても、現実問題として進学や就職が厳しい生徒もいる。中退リスクがある生徒には、包摂的なサポートが求められるのだ。

身もメンタルな問題を抱えるようになる生徒は少なくないでしょう」

また、家庭が宿題をできる環境になく、親も子どもの勉強に関心をもっていないため、小学校2、3年の段階で学習に躓く生徒もいるという。その状態で高校の教科書を開いてもとても理解はできず、入学早々に学ぶことをあきらめてしまうケースもあるだろう。このような経済的困窮に由来する問題は、高校無償化だけでは解決することはできない。

これらはいずれも幼いころから長い時間をかけて積み重なってきた問題だ。不登校などの問題に詳しい全国Webカウンセリング協議会理事長の安川雅史氏は、彼

らが抱える問題の根の深さを示す、共通のバックグラウンドを指摘する。

「高校で不登校になる生徒は、多くの場合、小学校や中学校でも不登校を経験していることが多いですね。根本的な問題を解決しないまま高校に進学しても、また同じことが起きてしまうのです」

不登校経験のある生徒は高校に入ると自分をリセットしようとして最初は頑張る。しかし、夏休みを過ぎるころには息切れしてしまうことが多いという。1年の夏休み明けに問題が生じてくるような生徒については、そのような背景も想像してみる必要があるのではないだろうか。

2 どうすれば中退を阻止できるか？

生徒の変化を早期に発見することが重要

では、このような問題を抱えた生徒を中退させないためにはどうしたらいいのだろうか？ まず重要なことは、生徒の異変をできるだけ早期に発見することだ。

図2の中退理由で「欠席や欠時がたまって進級できそうもなかった」が半数以上を占めているように、不登校が中退の直接の引き金になっているケースは非常に多いのではないだろうか。

しかし、不登校になってからでは生徒と直接話をするのも難しくなり、対処が難しくなってしまう。また、中退リスクが高い生徒ほど、自分から先生に相談してくるケースは少ない。学校に来ている間に、先生が気づいてあげられるかどうか、鍵を握るだろう。

「問題を抱えた生徒は必ずサインを出しています。不登校になる前にそれに気づくには、生徒同士で過ごしているときの様子を先生がしっかりと観察することでしょう。例えば週に数日も教室で昼食を食べていると、生徒の人間関係の異変にも気づくのではないのでしょうか。また、私は教員時代、毎日クラスの生徒に興味や興味や生活について尋ねるさまざまなアンケートを取っていました。生徒に楽しんでもらうような仕掛けが必要ですが、うまく習慣化できれば、回答の内容や筆圧などからも生徒の変化が読み取れ、大いに指導に活かせました(安川氏)

図4 3年後の自分の姿を想像した今後の進路希望(複数回答)

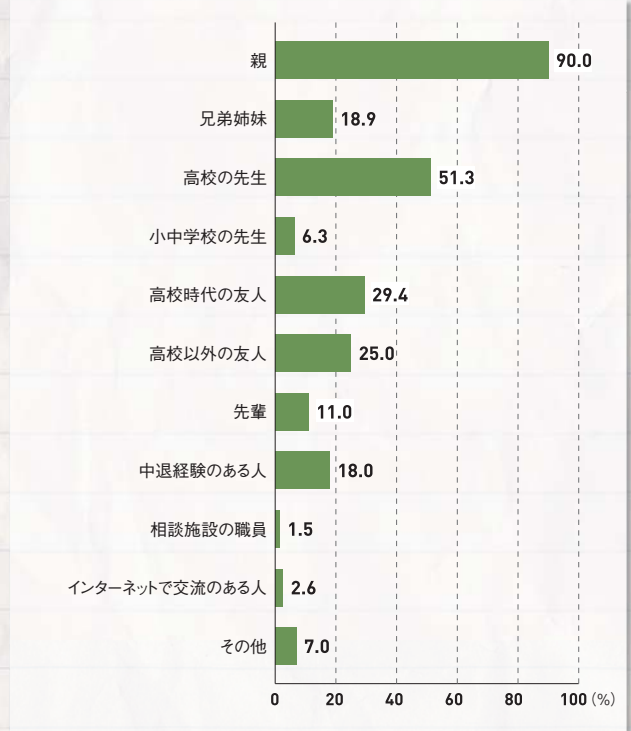


とはいえ、高校の先生たちだけで生徒が抱えるすべての問題に対応することは難しい。そこで学外の諸機関とうまく連携することがポイントになってくる。具体例として、神奈川県立田奈高校の取り組みを紹介しよう。

同校は進学も就職も決まらずに中退・卒業した生徒がその後も苦しんでいる状況を改善するため、在学生だけでなく中退者・卒業生も対象としたキャリア支援センターを2010年度に立ち上げた。

その主要な取り組みの一つが田奈Passという相談支援事業だ。地元のパートナル・サポート・サービス(PS・P35)と連携し、臨床心理士とキャリアカウンセラーが同機関から週1回センターを訪問。特に重い問題を抱えた生徒に対して、

図5 高校を辞めることを相談した相手(複数回答)



出典：内閣府「若者の意識に関する調査(高等学校中途退学者の意識に関する調査)」
※高校中退後おおむね2年以内の者を対象に調査(図4、5とも)

**外部機関との連携が
教員の新たな役割**

教員と密に情報交換をしながら、メンタル面、キャリア面の両方からカウンセリングと必要なケアをしていく。

同センターのもう一つの主要事業であるバイターン(→P35)も、この事業を企画したNPOとの連携の下、地元中小企業の協力を得て実施されている。

「完全とはいえませんが、今は、学校の外に支援のしくみ、相談のしくみが整ってきています。しかし、知らない先生のほうが多いでしょう。かくいう私たちも、センター立ち上げのために調べ始めてから、地域若者サポートステーション(→P35)がある、PSが

ある、若者を支援するNPOや社会的企業がある、企業のCSRがある、全部活用できるじゃないかということを知って知ったんです。今ではそういった外部機関の協力を得ていくことが、教員の新しい役割だと考えています。こちらから積極的に外に出ていくことで、生徒にとって有益なつながりが生まれていきますね(同校キャリア支援センター/金沢信之先生)

外部の協力を得た重層的な支援体制が整うと、キャリア教育にも広がりが見られる。前述のバイターンは、インターンシップとアルバイトを組み合わせた田奈高校独自の試みだ。自分ではアルバイトをみつけれない生徒に有給で働く機会を提供することで、生徒は「働く」ことの意味を、実感をもって理解できる。

**高校と縁が切れれば
社会との接点を失う**

「有給で責任をもって仕事をすること、私たちは重視しました。学校以外の場所で期待され、それにこたえる経験を積むことが、自信や自己効力感の回復につながっていくのです。希望するアルバイトに就き、やりがいをもって働いている生徒は、学校での様子も見違えるように変わっていきます(金沢先生)

バイターンは卒業後の正規雇用までを視野に入れた取り組みであり、生徒の就労支援という側面ももっている。まさに包括的な取り組みの好例といえる。

では、中退リスクのある生徒の問題解決やキャリア教育にあたって、先生に問われることは何だろうか？

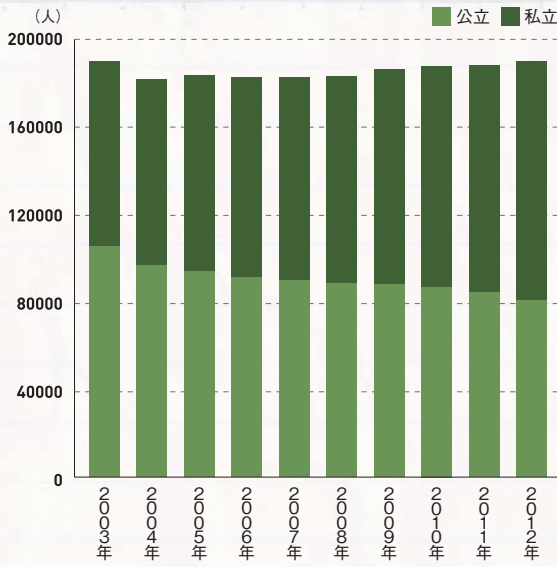
「やはり親身になって相談に乗ることでないでしょうか。それが生徒を学校になぎ止めることにもなりますから。生徒は真に信頼できる教師が一人でもいれば学校に来ると思います(安川氏)

そして、信頼関係を築くために必要なこととして、田奈高校の金沢先生はシンプルに「教員の熱意」を挙げる。

「支援体制を整えることは大事です。しかし、生徒が困ったときに思い浮かべるのは個々の先生の顔。現場の先生たちが熱意を失ったらどんな優れたしくみがあっても機能しないでしょう」

また、支援体制があっても、現実にはいっ

図6 通信制高校の生徒数の推移



出典：文部科学省「学校基本調査」

たん学校を去ると相談には来なくなる傾向が強い。進路が決まらないまま高校と縁が切れてしまえば、生徒は社会との接点を失ってしまう。中退後、社会復帰までに

3 高校を去る生徒に先生がすべきこと

進路や相談・支援機関に関する情報提供が必須

それでも中退を選択する生徒もいる。また、生徒が置かれた状況によっては、高校に残ることが必ずしもベストとはいえない場合もある。そこで先生には、中退をさせないよう指導すると同時に、生徒が高校を去る場合も視野に入れた指導をする

10年かかる例もあるという。「だから、いうまでもなく、いかに生徒を中退させないか、それに尽きると思います」(金沢先生)

ことが求められる。

第一に必要なとされるのはその先の進路に関する情報提供だ。

「例えば、欠席が重なって進級が厳しくなった生徒を、保護者の希望を聞いて留年させてもうまくいかないケースが多いのです。口には出さなくても生徒は同級生に後れを取った負い目を感じているものですから、根本的な問題が解決されていなければ、中退リスクはいつそう高まってしまいます。その場合、大学に進学したいのなら中退して高卒認定試験(↓P 36)を受験する道もありますし、通信制高校に転校して高校を卒業する道もあります。また、高卒認定試験にしても、独学、通信教育、予備校への通学など学び方の選択肢もある。通信制高校にしても学校によって教育内容はさまざまです。これらはそれぞれにメリット・デメリットがありますから、できればそういう情報を先生方が事前に収集し、生徒に提示できたら、生徒の不安を少しは軽減できるのではないのでしょうか」(安川氏)

もう一つ、特に問題を抱えたまま中退する可能性の高い生徒に対するセーフティネ

ットの提示も必要となる。生徒や保護者が学校以外に相談できる機関について幅広く情報提供しておくことで、中退後にどこに相談していいかわからず孤立する事態をできるだけ避けるためだ。

「具体的には、中退が決まった生徒には、地域の相談・支援機関のパンフレットをワンプックにまとめて生徒に渡していただきたいですね。すでに不登校になっている場合には、保護者宛に郵送してもいいと思います。とにかくそれが、彼らにとっての社会との接点になりうるわけですから」(宮本教授)

先生方も知っておきたい サポステ、PS

最後に、先生にぜひ知っておいてほしい代表的な相談・支援機関と進学先について触れておこう。

相談・支援機関としては、若者が抱える問題に包括的・継続的に対応してくれる地域若者サポートステーション(サポステ)とパーソナル・サポート・サービス(PS)の役割が注目されている。

「中退者に限りませんが、今、最終学校を出てから安定した職に就くまでの橋渡し社会的にも非常に重要になっており、全国にあるサポステやPSが、まさにその役割を担っています。サポステに来所する若者のうち、約3分の1は大学も含めた中退者。特に高校中退者の問題にはサポステ側も問題意識をもっていて、自分たちが

ら中退者の家庭を尋ねるアウトリーチ事業にも積極的に取り組み始めています」(宮本教授)

3年間で卒業も可能な 単位制の通信制高校

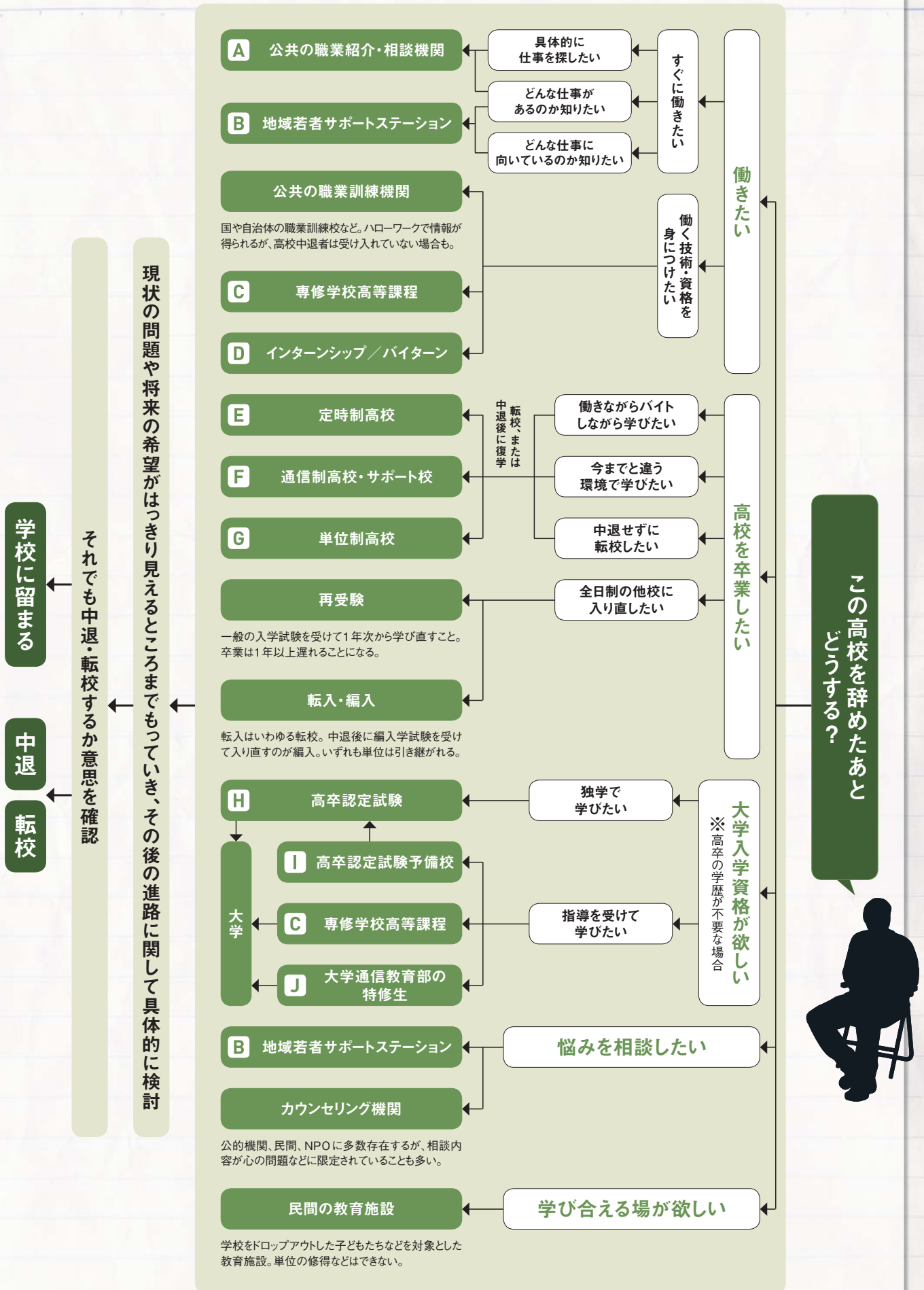
次なる進路として、今多いのは通信制高校への転校だ。単位制の通信制高校ならフレキシブルな単位修得ができるので、不登校の期間があった生徒でもリカバリーが可能。中退した場合は、再入学が編入学となり在籍期間が長引く可能性があるが、転校なら前籍校と合わせて3年間の卒業も十分できる。

私立の広域通信制高校を中心に学校数も増えていることから、以前なら中退か留年をしていた生徒が通信制高校に転校するケースが増えている。

ただし、通信制高校の教育内容は学校ごとに大きく異なる。例えば、比較的簡単に高校卒業資格が得られることを特色にしている学校もあれば、サポート校(↓P 36)と連携して、生徒の自立支援などに力を入れている学校もある。生徒によって適性は異なるので、高校の先生には、学校ごとの特色も踏まえた情報提供が求められる。

次ページからは、サポステや通信制高校も含む、さまざまな相談・支援機関や進路などに関する情報をまとめていく。ぜひ、中退リスクを抱えた生徒を指導する際の参考にしてほしい。

中退・転校“前”指導チャート



※上記A～Jについて、次ページから解説しています。ご参考にして下さい

A 公共の職業紹介・相談機関

若者に対象を絞った
相談機関も増えている

中退したあと、就職を目指す場合のアクセス先としては、ハローワークなどがある。最近では、若者就職支援センター、ヤングハローワーク、ジヨブカフェなど、若年層にターゲットを絞り、キャリアアカウンセリングから職業紹介までワンストップで対応している相談機関も各自治体で設置されている。これらの機関はハローワークに併設されていることも多く、ハローワークの

若年層向け求人情報や独自に集めた求人情報を提供している。

また、雇用保険を受給できない求職者や学卒の未就職者が、給付金を受けながら職業訓練を受けられる求職者支援制度の登録もハローワークで受け付けている。なお、条件を満たしている場合でも、訓練機関による選抜がある。

ただし、高校中退者は最終学歴が中卒になってしまいうこともあり、これらの機関を利用して安定した職業に就くのは非常に厳しいのが現実だ。

B 地域若者サポートステーション

複雑な問題を抱えた
若者を多角的に支援

原則15歳以上39歳以下の若年無職者に対して、職業的自立のための相談や支援を行う機関。略称はサポステ。厚生労働省の委託を受けたNPO法人などが運営にあたっている。主な役割は、キャリアアカウンセリングなどの相談事業、ジヨブトレーニングなどの職業意識啓発事業、他機関へのコーディネートなど。2007年度に厚労省のモデル事業となり、次年度以

降も一般事業として継続。2012年10月現在で全国114カ所に設置されており、さらに増やす計画だ。

内閣府のモデル事業「パーソナル・サポート・サービス(PS)」は、より幅広い年齢層に対して生活支援なども含めた幅広いサポートを行う。地域のサポステ運営団体がPSにかかわっている例も多く、サポステと関連性は深い。

いずれも、進学、就労、生活、メンタルなどの面で問題を抱えた高校中退者が包括的な相談に乗ってもらえる機関だ。

C 専修学校高等課程

通信制高校と連携して
高卒資格が得られる学校も

中学校卒業程度以上を入学資格としている専修学校の教育課程。高等課程のみをもつ専修学校を高等専修学校と呼ぶが、このほか、高等課程を併設する専修学校専門課程(専門学校)、美容師養成施設、理容師養成施設、調理師養成施設などがある。全国に500校があり、調理、ファッション、美容・理容、看護、IT、電気、機械、自動車整備、ビジネスなど学科のバ

リエーションは非常に幅広い。

修業年限は1年制から5年制までがあり、3年制を卒業すると専修学校専門課程の入学資格が得られる。また、文部科学省が指定した学科を卒業すれば大学入学資格を得ることもできる。

職業に直結した技能を身につけたい場合、高校からの転入学や中退後の編入学も可能。通信制高校(F)と連携して転編入を積極的に受け入れ、卒業時には高校(普通科)卒業資格も得られる専修学校高等課程も増えている。

D インターンシップ／バイターン

新しい取り組みである
バイターンに注目

インターンシップは、生徒が在学中に無給の就業体験を行うこと。中退リスクを抱えた生徒に働くことへの関心をもたせるうえでも一定の効果が期待できる。

神奈川県立田奈高校がNPO法人と連携して実施しているバイターンはインターンシップとアルバイトを融合した取り組み。まず、できるだけ生徒の希望に合った職場を学校が紹介し、3日間無給の職場

体験を行う。ここまでは通常のインターンシップと同じだが、バイターンでは、この後、

企業側が面接を行い、合格すれば有給のアルバイト採用となる。さらに適性の高い生徒には卒業後の正規雇用の道も開かれている。企業側はこの流れを前提として生徒を受け入れ、学校・NPO側は継続して生徒の成長をサポート。キャリア教育の環であると同時に、仕事をみつめることが困難な生徒への就労支援としても機能している。地域型社会課題解決モデルとして全国的にも注目されている取り組みだ。

E 定時制高校

昼間にも学べる三部制など
選択肢が多様に

夜間など特別な時間帯に授業を行う高校のこと。かつては、昼間に仕事をし、夜間に勉強したい生徒を主な対象としていたため、現在でも17時半前後に授業をスタートし、1日4時間程度学ぶ夜間定時制課程が中心。しかし、近年は、生徒の多様なニーズにこたえ、午前中や午後にも授業を行う昼夜間定時制課程も増加。午前中を1部、午後を2部、夜間を3部

とする三部制の高校や、さらに細かく時間帯を分けた四部制の定時制もある。地域によってチャレンジスクール（東京都）、フレックススクール（栃木県など）といった呼び方もされている。修業年限は夜間定時制の場合4年が一般的だが、昼夜間定時制課程の増加や、通信制（F）との連携、単位制（G）の導入により、3年で卒業できる定時制高校も増えた。
働きながら学び続けたい生徒やほかにも学びたいこと、やりたいことがある生徒の転校先としては有力な選択肢。

G 単位制高校

フレキシブルに
単位修得ができる

全日制高校の多くは一つでも単位を落とすと留年となる学年制。これに対して、学年に縛られず、科目ごとに単位の修得を重ねて、最終的に卒業に必要な単位数を得るのが単位制高校。1年を前期・後期に分けた2学期制が主流で、その場合は半期で単位修得が可能だ。通信制高校（F）や定時制高校（E）に多いが、最近では全日制の単位制高校も少しずつ増え始め

ている。卒業するには3年間の在籍が必要なのは単位制でも同様だ。
中退リスクを抱えた生徒の転校先として有力なのは単位制の通信制・定時制高校。例えば、全日制高校の1年次半ばで単位制の通信制高校に転校した場合、前の高校での修得単位はゼロだが、転校後の半年間で1年分相当の単位を修得すれば同級生に追いつける。中退による空白期間なしで転校した場合は、修得単位も在籍期間もスムーズに引き継げるので、トータル3年で卒業もしやすい。

F 通信制高校・サポート校

通信制高校の教育内容は
多様化が進んでいる

通信制高校とは、自宅学習によるレポートの提出、特定の曜日や夏季などに行うスクーリング（面接授業）、試験によって単位を修得できる高校。公立は学区がある高校が多いが、私立は全国が対象の広域通信制がメイン。修業年限は3年または4年。単位制（G）導入校がほとんど。
特に広域通信制は、近年、そのあり方が多様化。専修学校高等課程（C）や定時制

高校（E）と連携する通信制高校が増えていくほか、サポート校と連携して、生徒の教科指導や自立支援などに力を入れる高校も多くなっている。
サポート校とは通信制高校の学習を支援する塾のような存在で、生徒は実質サポート校に、通学する。経営母体は通信制高校と同じ場合もあれば異なる場合もある。学習意欲や人間関係に問題を抱えた生徒のケアに力を入れているサポート校では、全日制高校などから通信制高校に転校した生徒が数多く学んでいる。

H 高卒認定試験

集中して学べば
16歳で合格することも可能

さまざまな理由から高校に通えなかった人や卒業できなかった人などの学習成果を評価し、高校卒業と同等以上の学力があることを認定するために文部科学省が実施する試験。合格者には大学・短大・専門学校受験資格が与えられる。正式名称は高等学校卒業程度認定試験。以前は大検（大学入学資格検定）として実施されていたが、2005年度から若干内

容を変更し、高卒認定試験に移行した。
試験は8月と11月の年2回実施され、年度内に満16歳以上になる人であれば何歳でも受験できる。また、全日制高校に在籍していても受験可能。何歳で合格しても、大学などを受験できるのは高校3年相当の年齢になってからなので、早めに合格して、その後の期間は大学の受験勉強に専念する、海外留学するなどの選択も可能。なお、高卒の学歴が得られるわけではないので、その点は注意が必要。大学などへの進学希望者に適したステップ。

第一学院高校

人間関係作りからていねいにサポート

中学、高校でいじめや不登校などを経験した生徒を数多く受け入れている広域通信制高校の第一学院高校。通信制高校は学校ごとに教育内容が大きく異なるが、第一学院高校は、人間関係などで苦しんできた生徒へのケアに力を入れているのが特色の一つだ。

「通信制高校に転校してくる生徒の多くは、何らかのネガティブな経験を経て、疎外感や不安を感じています。ですから、私たちは、まず生徒・保護者それぞれに面接をして、生徒の気持ちを受容し、共感することから始めます。教科指導、受験指導の前に、生徒が『ここは自分の居場所なんだ』と感じ、安心して通学できる環境を作ってあげることが重視しているのです」(生駒富男理事長)

生徒がここでも疎外感を味わうことがないよう、友達作りに関して先生が徹底してケア、フォローする。先生の間で生徒の相性などを相談し、在校生に「あの子に声をかけてあげて」とアプローチすることもあるという。

もう一つの特徴が、生徒のモチベーションを高める教育だ。「基本にあるのが『自他肯定感教育』です。各種プログラムや教材を通して、自信を失っている生徒から『できない』『無理だ』という思い込みを取り除いてプラスの自己像を描かせたり、自分の幸せだけでなく他人の幸せも追求することの意味を伝えたりしています。普段の授業や日常的なコミュニケーションでも繰り返し同じメッセージを話し続けるなかで、もちろん個人差はありますが、生徒たちは少しずつ変わっていきます」(生駒理事長)。

生徒が抱える根本的問題にしっかりとアプローチすることで、結果として、卒業率や大学進学率などの面でも同校は高い成果を挙げている。しかし、同校の目的はそこだけにはとどまらない。

「一連の教育を通して目指しているのは、社会に出て活躍できる人材を育成することです。そのため、今後は、卒業生へのキャリアサポートにも力を入れていく予定です」(生駒理事長)

● EMS(The Educational Method of Self-motivation)

EMSとは、最近の脳科学の成果を取り入れた生徒自身が自分を意欲喚起できる同校独自の教育メソッド。これに基づいて意欲喚起特別講座「MAP」(Motivation & Achievement Program)や「セルフコーチプログラム」を実施。MAPではマイナスの自分を白紙化し、プラス面をさらに伸ばす取り組みを行う。



例えば、数学が苦手なら、あえて「数学は得意だ」とシートに書き出し、口に出して言うことで、マイナスの自己像をプラスの自己像に転換していく

● 他喜力教育

同校の教育の柱の一つ。周囲の人の幸せが、自分自身の活力にもなり、より大きな幸せにつながることを、さまざまな体験やジョブシャドウイングを通して伝える。先生が上から語るのではなく、地域の方々の話や働く人の姿を見て、生徒は将来を前向きに考え、今を元気に意欲的に過ごすようになる。



地域の方を講師に招き、ワークショップを実施。こうした場を数多く設けることで、生徒は自分の気持ちや意見を表すことに慣れていくという

I 高卒認定試験予備校

同じ目標をもつ仲間と
高卒認定試験合格を目指す

高卒認定試験を受験するには、過去問題集や参考書を活用して独学する、受験対策の通信教育を活用して学ぶ、予備校に通学して学ぶという3つの道がある。

すでに一定の学力があり、自分で学習を続けられる意欲と能力がある生徒なら、高校を中退後独学で学ぶことも可能。しかし、学力や学習意欲などの面で問題があつて中退する生徒の場合は、通信教育

か予備校通学が現実的だ。通信教育はインターネット授業やDVD教材を活用して自宅で学習するスタイルで費用も抑えられるが、仲間と一緒に学ぶことで意欲を高めたい、あるいは同時に人間関係作りにも取り組んでいきたい生徒には予備校への通学が適している。

なお、高卒認定試験は高校の教科に対応した計8〜9科目があり、高校での単位修得状況によって科目免除も受けられることもあり、中退してチャレンジする場合の学習期間は個人によって差がある。

J 大学通信教育部の特修生

大学通信教育部正科生への
パスポートになる

大学・短期大学の通信教育部の中には、さまざまな理由で高校を卒業できなかった人などを対象とした特修生制度を設けているところもある。通常、大学・短大の通信教育で学ぶためには大学入学資格が必要だが、特修生制度を利用すれば、高校中退者なども受講が可能。

大学によって制度の詳細は異なるが、特修生として1年以上在籍し、所定の単

位を修得することで、当該大学・短大通信教育部の正科生として入学する資格が与えられるというのが一般的。なお、特修生には大学・短大の単位は与えられない。制度自体があまり知られていないが、大学受験資格を得られるステップとしては注目したい選択肢の一つ。通信制大学・短大には福祉系の資格や保育士などの資格が目指せるコースも多く、やりたいこと、学びたいことがすでにあつて、早く勉強を始めた生徒などには適しているルートとなっている。